

文部省選定

老いを生き 老いを支える

カラー・35分
VHS 30,000円
(消費税別)

— 東京の在宅患者さんたち —



■企画：宇津宮 幸枝
■製作：(株)桜映画社
■協賛：東京都地域婦人団体連盟

■推薦の言葉

ライフケアシステム代表
白十字診療所医師 佐藤 智

宇津宮先生が、35年開業されてこられた「暖かい眼」で、「心から信頼している老人」と語る姿は美しく、人の心を打ちます。家で老人を世話するという「在宅ケア」は、確かに難しい問題を抱えていますが、「その人らしく」ありうるのは、永年住み慣れた「我が家」で生活することです。公的介護保険が始まろうとしているときに、この映像を通して在宅ケアの問題を自分達一人一人の課題にして頂きたいと思います。

宇津宮 幸枝 1912年福岡県八幡市生まれ
略歴 帝国女子医専卒業後、病理及び細菌学の研究のかたわら内科臨床に勤務
1956年東京都葛飾区で内科医院開業
1972年一人で初めてスウェーデンへ以後老人医学にとりくみ、欧米諸国の老人福祉施設を度々視察し、寝たきり老人の往診など地域医療の現場で地道で精力的な活動を続ける
1990年引退和歌山県深和ホーム在住



■老いをみつめて

宇津宮 幸枝

安心して年老いることのできる社会を求めて活動した一開業医が、現役時代特に励行した「在宅ケア」に思いを馳せ、心の残る人々を訪ねて出来上がったのがこのビデオです。

私は内科医、殊に老人を多く診察する方針で開業医として30年余りを経て、この間に人間的悲劇をたくさん経験し、また老いゆく人々の生活問題についてもいろいろと教えられました。家族に囲まれ畳の上で死にたいと願うのは、日本の老人としてナイーブな願いです。医師会の会議でも、往診-在宅ケアを提案してきました。

近頃、厚生省が新ゴールドプランにより在宅ケアを容易にする立案を示しましたが、今まで家族内ではいかに家族の負担が大きかったことでしょう。愛情を持って接する内にも、仕事が多くなり疲れ果てて行き届かなくなったり、感情的になって冷たくあしらう場合が数多くあります。

現状から飛躍して、よりスピーディーに自治体の計画が実施され、ボランティアによる人手が増加して、介護がしやすくなるとともに、家族の負担も減り、老いた人の苦痛が軽くなる、即ち老人福祉の進行につながってほしいと願います。

このビデオが在宅ケア改善の、小さな一つの引き金となってほしいと切に思います。

■ あらすじ

引退した宇津宮先生は、開業中に往診した老いた在宅の患者さんたちのことが気になって訪ねてみることにした。

まず訪ねたのは、79歳の向後セキさん。温かい家族に見守られているが、心臓の持病があり最近では目や耳も不自由になって家の中でじっとしていることが多くなった。寝たきりにでもなったら外部の援助が必要になるのではないだろうか？

脳血栓などで痴呆症状が出て寝たきりになった小柳ハナさん（85歳）も、娘さんの一家と暮らしているが、家族は地域の中間施設のショートステイやヘルパーさん、入浴サービスなどを利用して、家族の生活と介護とを上手に両立させている。

保健婦の衣川さんを訪ねて訪問看護の現状を聞く。訪問看護については、患者さんよりもむしろ家族の方が必ずしも歓迎しないこともあるとのこと。外部の人を家に入れることに意外に抵抗感があることもあるという。

家族と暮らす人たちに対して、一人暮らしの老人たちも数多い。そしてその割合は、ますます増えていく傾向にある。一人暮らしの患者さんは、衣川さんの訪問をひたすら待っている様子が偲ばれた。西川さん（68歳）は、リウマチで食事作りにも苦勞している。

そんな一人暮らしの人たちに給食サービスをしているボランティア団体「せせらぎ」の活動がある。需要に対しては僅かな数にすぎないが、区内のあちこちにこうした活動の芽が生まれはじめているという。この活動の生みの親である高田さん（82歳）は、老人福祉に力を尽くす毎日を送っているが、自身も一人暮らしである。

老いて自宅で暮らす人たちがいる一方で、病院で暮らす人たちもいる。採算を度外視して老人たちの長期入院を受け入れている西川病院を訪ねてみることにした。世話をしていた家族自身の老いや住宅事情その他さまざまな理由で社会的入院を余儀なくされる人も多いという。

誰も老いを逃れることは出来ない。しかし、季節にそれぞれ的美しさがあるように、老年期にも自分らしい輝きを持って生きたい。それは夢や理想を持ち続けることで、可能となるだろう。そして老いに向かって確かな生活基盤と心構えを準備したい。



製作スタッフ

企画・監修—宇津宮幸枝
製作——福間 順子
演出・撮影—中井 正義
演出助手——ヤネコベチヨリニ
ナレーター—細田百合子
音楽——野見 祐二
録音——後藤 友輝